

小学校における組織的な授業研究に関する研究 —授業研究を活性化させるための要因と方法—

教育実践高度化専攻
授業実践リーダーコース
P08025F
細見 隆昭

1. 問題の所在と研究の目的

現在、我が国の学校教育現場では、若手教師が増加していることなど様々な要因から教師の授業力の向上が喫緊の課題となってきた。そのため、授業力を向上させるために学校を基盤とした組織的な授業研究の取り組みが注目されている。

そこで、本研究では、組織的な授業研究を活性化するための要因とその方法について検討することを目的とする。特に、授業研究会に参加する教師の満足度を高めることを重視し、授業研究の持つ如何なる要因が総合評価を規定しているのかということについて明らかにする。また、教師の省察過程を明らかにし、授業リフレクションを有効に機能させるための授業研究の方策についても明らかにする。

2. 研究方法

まず、授業研究に関する先行研究を批判的に検討し、その知見から本研究における授業研究に関する語彙を定義する。次に、教育実践研究開発プロジェクト実習や教育実践改善研究実習において、現任校の授業研究に継続的に関わり、その実践を通して授業研究の効果的な要因や組織的な授業研究の活性化の方策について明らかにする。さらに、授業リフレクションを用いた授業研究の事例を分析することから、組織的な授業研究を推進するための要因を明らかにする。

3. 授業研究の定義

本研究では、自律的、創造的、組織的に行う校内研修における授業研究を研究対象とする。そもそも授業研究とは、その学校の教師が参加し、自校の教育目標を中心に学校や児童生徒の実態に即した主題を設定して行うものである。ここでは、同じ職場にいる教師たちが、共通する対象や課題から主題を見つけ、日常の実践の中で検証しながら共通理解を深め、専門的力量を高めていく授業研究は、自己研修の主体性と集団研修の組織性を併せ持つものといえる。

そこで、本研究における授業研究とは、事前検討会、研究授業、事後協議会を1つの単位とし、研究テーマに沿って授業の事実に基づいた授業の検証を組織的・協同的に行い、その成果を共有することと定義する。

4. 研究内容とその分析

4.1. 授業研究における活性化要因の分析

授業研究が活性化する要因を探るために、現任校で開催された授業研究会において、参加者に質問紙調査を実施した。

授業研究の形態は、授業研究の目的に応じて、講義型、従来の話し合い型、ワークショップ型というように工夫した。そして、合計7回の授業研究会のうち、参加者の総合評価が高かったのは、ワークショップ型であった。

次に、兵庫県立教育研究所の研修会評価を参

考に、授業研究の特性を測定する質問項目を作成し、4件法で回答を得た。項目は、(1)新しい知識が獲得できる、(2)今後の実践に役立つ内容である、(3)主体的に参加できた、(4)他の教師と協働できた、(5)日頃の実践をリフレクションできた、(6)総合評価、の6点である。そして、総合評価を目的変数、それぞれの項目を予測変数として重相関係数を計算した。その結果、今回の授業研究に対する総合評価の規定因は、(1)知識の獲得、(4)協働、(5)リフレクション、が有意となった。

4.2. 省察を取り入れた授業研究の事例分析

4年生外国語活動の授業で、授業リフレクションを取り入れ、授業研究を質的に分析した。ここでいう授業リフレクションとは、自分の授業の振り返りを取り入れた授業研究の方法の総称で、教師の経験や内面過程に注目した研究手法である。

ここでは、講師経験4年目の教師Aの授業の後、筆者がメンターとなり対話リフレクションを行った。まず、筆者がデジタルカメラで撮影した授業中の課題を提示し、授業者に振り返りをしてもらった。その結果、授業者は自らの具体的な言葉で授業改善の方法を述べることができた。つまり、授業リフレクションを授業研究に取り入れると、授業者は自らの実践をリフレクションし、自己やメンターと対話することで、新たな授業実践を行うことができるといえる。

以上のことから、授業リフレクションが授業を改善し、教師の力量形成に有効に機能することが明らかになった。

5. 考察

5.1. 授業研究の量的分析に関する考察

4.1.では、授業研究を活性化させる要因を、教師の主観的評価によって規定した。それは、(1) 授業研究において、新しい知識が獲得できること、(2) 他の教師と協働できたこと、(3) 日頃の実践をリフレクションできること、の3点であった。つまり、授業研究に参加する教師の総合評価を高めるためには、新しい知識を得る場面を多く設定し、他の教師と協働して授業研究を進め、日々の実践をリフレクションできる振り返りの場を多く持つことであるといえる。

5.2. 授業研究の質的分析による考察

4.2 では、授業リフレクションの有効性を、メンターと授業者の発話から分析した。ここでは、授業リフレクションが、授業者にとって自らの実践をリフレクションし、自己やメンターと対話することで、新たな授業実践を行うことが可能になることがわかった。つまり、授業リフレクションが授業を改善し、教師の力量形成に有効に働くといえよう。

6. 研究の成果と今後の課題

本研究では、組織的な授業研究を活性化するための要因と方法について検討してきた。そして、授業研究に参加する教師の満足度を高める要因を統計的に明らかにすることができた。また、授業リフレクションが授業改善に有効であることも明らかにした。

今後の課題は、授業研究で得た教師の学びが、各教室でどのように発揮され、組織的な授業研究が児童の能力形成にどのように寄与するのかを明らかにすることである。そのための、授業研究会の効果測定に関する研究を進めたい。

修学指導教員 天根哲治・永田智子
指導教員 佐藤 真